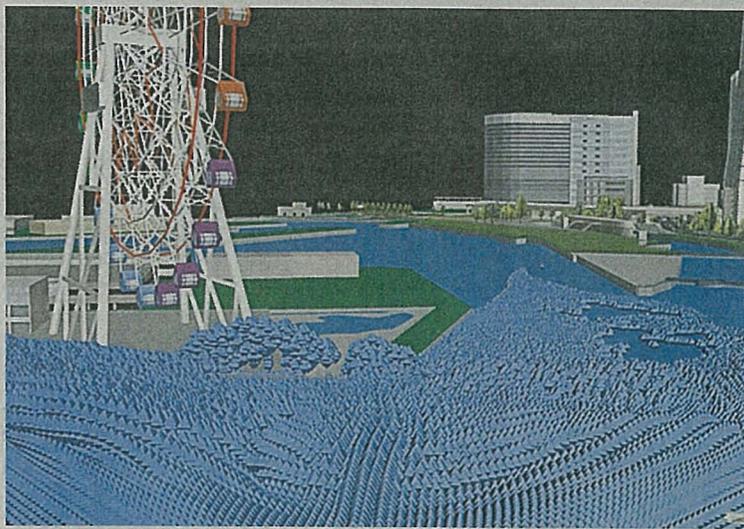


# 津波襲来 3D予測

津波が襲来する様子を立体的に表現するシミュレーション技術の開発に、東北大と富士通が乗り出すことになった。世界最速のスーパーコンピュータ「京」を使って津波による浸水や建物の破壊を高精度で予測し、その情報をあらかじめ住民らに提供することで防災・減災に役立ってもらうという。

## 東北大など、スパコン「京」駆使



津波を立体的に再現したシミュレーションのイメージ図＝富士通提供

# 高精度情報、防災に活用

## 数年内実用化

同社の山本正巳社長や東北大災害制御研究センターの今村文彦教授らが21日、仙台市で会見して発表した。

東北大はこれまでIBMなどと共同して、東日本大震災で襲来した津波を2次元で再現する研究にあたってきた。シミュレーションの結果は、仙台市などが住宅地での浸水深や防潮堤、

河川堤防の効果などを調べるとに使用している。

一方、富士通は特殊な計算方法で立体的に津波を再現する技術の開発を進めてきた。その技術と東北大が調べた津波や建物被害の実際のデータとを組みあわせることで、「3次元津波シミュレーター」を共同開発することになった。知れた土地の地形にあわせて津

波がどう浸水し、河川をさかのぼり、建物を破壊するか予測するソフトだ。

3次元のシミュレーションには膨大な計算が必要のため、富士通や理化学研究所が開発したスパコン「京」を利用する。500台のパソコンをつなげて5日間かかる計算が、数分で済むという。

シミュレーション結果は

自治体などに提供し、ハザードマップや避難誘導のマニュアル、避難ビルの設計などに生かしてもらう。数年以内での実用化を目指すという。

山本社長は「津波の動きが事前にわかれば、住民もどう逃げたらいいかわかる。日本だけでなく世界各国で利用できるものにした」と話した。